

第 101 話<筑豊>の要約と参考資料

第 101 話<筑豊>の要約

富高コユキさんは鉱夫の暁さんからプロポーズされたとき、「財産のない者の嫁にはやれん」と反対する家族を押し切って結婚。筑豊の炭鉱に移って内職や仕出し屋で家庭を支え、家を新築して「財産をつくってみせる」夢を実現したのに、体はすでにヒ素に蝕まれていました。

第 101 話<筑豊>の参考資料

川原一之著「流離天女」（「土呂久羅漢」所収）

P130~

その毒煙の中で、わたしゃ働いたとです。小学校の夏休みとか冬休みに、団鉱づくりに出ている母のハツの仕事を加勢したのが、鉱山で働いた始まり。高等科 2 年で学校やめたあとも、1 年くらい団鉱づくりに出たですかね。家から鉱山にくだる途中で、口の悪い部落の人が、「お前や、あげなとこで働きよったら嫁女のもらい手がねえなるぞ」ち悪たれつきよった。なにも好き好んで、あの煙の中で働いたっちゃないとです。金儲けがほかにない時代でしょうが。現金収入のどしても欲しい百姓家では、誰かが鉱山に出て働かなやっっていけんかったってす。大きい百姓家は、わたしとこのような小さい百姓家と違って、鉱山で働かんでも生活が立っていきよったですけね。わたしゃ悔しいから、こげ言うて返しよりました。「いいわん、お前えとこから嫁女にもろうてもらわんでも、行くとかいっばいあるわい」。その人が「かな山を休んで、うちの田植えを手伝いに来てやらんの」ち頼んできても、腹がたつけ「お前んとこにや手伝い行かんばい」と断るこってした。(略)

嫁女にもらいたいち言うてくれた人、そこにおるじいちゃんは、同じ 3 番坑で鉱石を掘る手ぐり鉱夫やっったってす。土呂久鉱山が一時休山になった日、大正 15 年 11 月 19 日に 2 人でカンテラ磨きよったとき、プロポーズされました。プロポーズちゅうても、「お前や、どっか嫁さんに行くとな」「いや、行かんよ」。それだけのこと。あとからわたしの家に来て、「コユキを嫁にくれ」と頼んだところが、頑固者の虎太郎じいさんに反対されました。「財産のない者にコユキはやれん」。財産のある家ちゅうのは、ちゃんとした百姓家のこと。昔の百姓は気位が高かったから、尋常科 6 年を卒業した明けの日から坑内に下がるような男に、嫁はやれんという考えじゃったってす。親たちも部落の百姓家に嫁に出す腹づもりだったようですが、わたしゃ「部落の者は好かん。都会の空気を吸ったことのある男じゃないと一人前とはいえん」ち考えとりました。「財産ある百姓家に嫁に行て、こきつかわれて恩着せられるより、親譲りの財産なんかあてにせず、夫婦で働いて自分たちの財産をつくってみせる」。そげな気持でした。

P137~

それに比べ、炭鉱は無料で医者にかかれるちゅうじゃないですか。シナ事変の始まった時代でしたが、炭鉱は召集された者の家族の面倒もみるという話です。わたしたちは土呂久を離れることに決めました。福岡県田川郡の炭鉱へ行った知り合いに照会すると、「いま人をいれるところだから出てこい」と返事があったってす。炭鉱行きの話をしたら、親戚中に猛反対されました。「炭鉱には、人殺しとか監獄行った者が多いげな。そんなところ行って、どげするの」。あの頃は、炭鉱はあたり前の人間が働く場所じゃないと言われとりましたけね。山奥の土呂久の者でも、炭鉱はこの世の地獄のごとと思ひよったとです。周りの反対が強いもんじゃけ、先にこの人だけ炭鉱に行って、様子をみてからわたしと子どもを呼ぶことにしました。わたしたちや、この人の生まれた上村で農業しながら待ちましたが、わたしには百姓仕事が性に合うとりません。百姓は夜明けとともに田んぼに出て、お日さんがかんかん照る中で汗水流して働いて、夜は遅うまで夜業をします。朝も昼も晩もないってす。わたしや、きりのない生活が好かんとです。そこいくと、鉱山は何時から何時までと働く時間が決まっいて、けじめのある生活ができました。給料制なので生活の設計も立ったってす、百姓は天候しだい、その年の収入の見通しすらはっきりせんてすけね。わたしや百姓より働きに出た方がいいという気持でした。赤池炭鉱のこの人から「出てこい」と連絡があったときは、嬉しゅうて大喜びで炭鉱に行ったってす。ただ「炭鉱には人殺しが多い」と聞かされていましてから、どげなとこじゃろかと不安もいっぱいでした。(略)

「親の反対押し切って出てきたからには、泣きごとは言わんぞ。見とれ」。そげな気持で、炭鉱の生活を始めたってす。筑豊で暮らして45年、人殺しにも慣れました。「一つ叩かれたら、十叩き返せ」という炭鉱の生き方も身につきました。炭鉱の人間はものごとの白黒をはっきりさせるから、よその土地の者には険があるように見えるけど、本当は人情が豊かですからね。なんにでも鷹揚で、その代わり陰でこそこそする田舎の人間よりか、わたしの性格に合うちよります。土呂久より筑豊の方が、わたしやよっぽど暮らしい。故郷を離れて筑豊に流れてきてよかったと思ちよります。筑豊は地獄なんかじゃない。人間らしい土地です。毒の煙の中で暮らさにゃならん土呂久の方が、よっぽど地獄じゃないですか。

P140～

(長男の忠則が爆発事故で死んだあとで) わたしたちの戸籍を岩戸から鞍手に移しました。故郷を捨てて筑豊の人間になった者が、戸籍だけ岩戸に残しとくのはおかしいですもんね。戸籍を動かしたとき、未練をきっぱり断ちました。筑豊は山崩れはなし、地震はなし、家を倒すような台風もきません。土呂久より、わたしには住みやすい所です。新しい故郷をここに定めて、骨埋める覚悟を決め、近くのお寺に納骨堂も買いました。今はきたない家に住んどりますが、今年中に地あげして新しく建て替える予定にしちよります。新築する家が、わたしたち夫婦の築きあげた財産です。「自分たちで財産つくってみせる」ちゅう気持で、親の反対を押し切って結婚し、周りが止めるのもきかず炭鉱に出てきた2

人が、この世に残す最初で最後の財産ですたい。

P146～

それから 40 日たった 1 月 27 日、延岡から裁判官が来て病院で臨床尋問がありました。あの世へ行ってしまわんうちに、原告のわたしの話を聞いておこうというのでしょうか。食欲はない。60 キロの体重が 45 キロに減った。心臓は弱って、血圧が高い。咳はでる。痰はきれん。おまけに神経が痛む。朝から注射と座薬を入れてもろて、ベッドに寝たまま、弁護士の質問に答えたってす。1 時間半くらいかかったですもんね。付き添った看護婦が、びっくりしたように言うのですよ。

「ばあちゃん、40 年も 50 年も昔のこと、よう知っちょるなあ」

「わたし今朝のこと忘れても、若いころ体に叩きこんだこと忘れんばい」

近ごろは、昔のことが夢の中にでてくるってすよ。土呂久鉦山の三本辻の石段で、サツキさんが下腹押さえて苦しみよります。タオルかぶって縞の前掛けした、坑内で働くときの恰好で。

「ああ痛い。コユキさん、ちょいと下に柔らかいもん敷いておくれ」

石段のような固いところで小便ばると下腹が痛むとですが、どうしてか、柔いものの上にもちょこちょこすれば痛まんちゅうとです。

「タオルか綿花を敷いちくり」

顔をゆがめて、わたしに頼むとです。

「赤土の上に行てばってきたら」

「そこまでがまんができんとよ」

わたしが綿花を敷いてやると、しっこをちよつとぼって、サツキさんが嬉しそうにわたしを見て笑うとです。美しい顔をしちよりましたがね、サツキさんは。

この夢を見始めてから、わたしもおしっこがたまると、下腹が痛くなりだしたとです。医者に行くと、膀胱炎と言われました。それで、サツキさんが夢に出てきたわけがわかったとです。あのころ、鉦山で働いた者の中には、小便のとき、下腹が痛がる者が多かったですがね。この病気もやっぱり、亜砒の毒のせいじゃないでしょうか。土呂久を離れて 50 年たって、わたしの体にこもった亜砒の毒が、こうして体のあちこちに病気を起こしよるとじゃないですか。土呂久を捨てて逃げ出したわたしにも、亜砒の毒は死ぬまで取り付いて苦しめつづけるとじゃないですか。

サツキさんは喜右衛門さんの長女で、わたしより 2 級上でした。毒の煙の中で暮らした一家は、家中が喘息にかかっちょりました。最初に母親のサキさんが死んで、つづいて三女のカホルさんが死んで、サツキさんが死んで、長男の袈裟喜さんが死んで、喜右衛門さんが死んだってす。たった 2 年の間に 5 人が死に、残った 2 人もあとを追うようにして死んだと聞きました。この一家が死につぶれたあと、誰が仏さんを祭りよるやろかち、心配になるとですよ。わたしが帰れる体なら、ま一回土呂久に帰ってお墓に花でも供えたいと思うってす。同じ鉦毒病に苦しむ者が、鉦毒に命を奪われた人たちの弔いに帰るのな

ら、土呂久も喜んで迎えてくれはせんじゃろか、たとえ土呂久を捨てて、筑豊に住みついたらわたしでも。